

南部アフリカ地域における 農業開発研究と SACCAR

プロジェクト開発研究領域 助教授 門平睦代

南部アフリカ地域農業生物資源研究訓練センター (Southern African Centre for Cooperation in Agriculture and Natural Resources Research and Training: SACCAR) は1984年にSADCC、現在の南部アフリカ地域開発共同体 (SADC) により設立された。南部アフリカ地域における農業と天然資源にかかわる研究と訓練を実施するための調整役を果たし、SADC加盟国間での農業開発協力を振興することを目的としている。中心となる活動としては、農業天然資源に関するインフォメーション・サービス (出版、データベースの作成など)、ワークショップや会議の開催、研究費と海外旅費の交付、人材訓練、インパクト評価とモニタリングがある。同様な組織が西アフリカ (CORAF) と中央・東アフリカ (ASARECA) 地域にもあり、世界銀行 (ワシントンDC) のSpecial Program for African Agricultural Research (SPAAR) がこの3センターのまとめ役を演じている。

SADC下での運営が、1998年12月1日よりボツワナ農業省農業研究部のもとに移り、それまで20数名いたスタッフが現在は5名だけとなり、活動内容の大幅な見直しが必要となったので、昨年11月ザンビア国ルサカ市にて今後5ヵ年間の戦略の見直しをするためのワークショップが開催された。このワークショップはフランス外務省とNORADがスポンサーとなり、ザンビア農業省とSADC植物遺伝資源センターがホストとなり実現したものである。この会議の結果に基づき、5ヵ年計画の

草稿が今年の1月に提出されたが、この草案では、地域間での研究と研修活動の調整と統合、この分野におけるパートナーシップ、そして情報とコミュニケーションの振興を目指しながら、SACCAR自身の機関としての管理能力の強化を行うなど、4つの柱が掲げられている。

名古屋大学・農学国際教育協力研究センターとの連携としては、次のような点があげられよう。1) 南部アフリカ全体の農業生産状況を踏まえた、農業開発に関する研究課題の発掘、実施とその研究成果の普及、2) データベースなど情報の伝達、交換システムに関する共同開発、3) 海外農業開発プロジェクト実施組織のJICAなどへの提案書提出、日本への留学生・研修生派遣のための仲介役などである。SACCARとの連携を育むために、ナミビアの案件など南部アフリカで実施するであろうICCAEの活動に関して、互いに連絡をとりながら運営していくことが望ましいと考える。



ネパール現地調査の記録

第一号で紹介したネパールでのJICA農林プロジェクト評価に関連して、名古屋大学大学院生命農学研究科の教官6名と大学院生1名が現地足を運んだ。その時の感想や体験を文章にまとめていただいたので報告する。

ネパール日記

地域資源管理学講座 大学院博士課程前期課程
(水土保持学研究分野) 2年 金指 努

「ネパール村落振興・森林保全計画の評価調査」のために昨年11月、名古屋大学・生命農学研究科・地域資源管理学講座の服部、近藤両先生に同行させていただき、実際にネパール王国の様子を肌で感じる機会が得られました。ネパール王国に対する森林問題に関する私の知識では、燃料を得るために立木を薪として切ってしまうため減少しているという程度でした。そしてネパールの国土および現在取りざたされている森林問題から連想して、ネパールの山々には鬱蒼とした森はなく、木がまばらにしか生えていない地域が広がっていると思っていました。

ところが、カトマンズから飛行機で目的地のポカラに着くと、私の想像したネパールはどこにも見あたりませんでした。私が訪れたアルパ村とモウジャ村では、森の中に入って見上げると樹冠に覆われているため陽の射し込みは少なく、見晴らしのよい場所から周囲を見渡しても、山の斜面で地表の色が見えるのは収穫の終わった棚田と一部に存在する崩壊地のみ。ポカラから村への行き帰りの途中、薪を売りにポカラへ向かって歩く女性を数人見かけましたが、私の歩いた地域に根こそぎ伐採された跡は見られず、そこは森林豊かな場所でした。

もちろん私が訪れた場所はネパールのほんの一部。しかもわずか3日程度。ネパールにとって例外的に森林が繁茂している地域の一部および時間の瞬をいかみただけなのかも知れません。しかしながら、ある国のほとんどの地域を自分の目で見られる人は果たしてどれくらいいるのでしょうか。総合的な情報を得るためには、正確な情報を集め、的確にまとめ上げる個人の人が必要だと感じました。



ラメチャップの静かな時間

植物遺伝育種学研究分野 助教授 北野英己

今回、急きょ西村先生のネパールプロジェクトに参加させていただく機会を得た。この国はおろか海外経験の少ない自分にとっては、経験豊富な門平先生や巽先生らと同行できるというものの、未知の世界を見る期待と不安を同居させての現地入りであった。12月19日にカトマンズに1泊後、翌朝7時に出迎いの車で今回の主要目的地であるラメチャップに向けて出発した。我々は、現地スタッフも含めて総勢7名で車に揺られること8時間、最初の宿泊地であるマンタリに到着したのは午後3時であった。途中、峠から見た遥か彼方に聳えるヒマラヤの雪峰に感激したり、悪路でドロにまみれて格闘する車にスリルを楽しんでいる自分に、傍を歩く人々の迷惑そうな視線が「おまえ何しに来た！」と戒めているようであった。

翌朝、運転手のラバさんを頼りに、ここから先は殆んど車の往来がないという険しい山道を約1時間半かけて登り、ようやくラメチャップに到着した。同行したシュレシタさんの案内で蜜柑園を形成する篤農家を視察後、門平先生、ラバさんと別れた我々5人は、1泊2日の徒歩による現地視察に向かった。慣れない足でくたばるのではという不安は、シュレシタさんの上手なエスコートや、林道をぬける度に広がる美しい農村風景に感激して何度も足を休めることで解消された。視察の第1日目は、サルファテの小さな町に宿泊した。ロウソクの灯と静けさの中で徐々にゆっくりと時間が過ぎていくのを楽しんだ。

第2日目も付近の農家を視察しながら山を下った。静かな自然を背景に、ここで訪れた農家の御主人や家族の人達、それに途中で出会った働く女性や学校に通う子供達の皆穏やかで豊かな表情を見る限り、この国の貧困というイメージは相応しくない。それどころか、この国には毎日時間に追われている自分たちが学ぶべき大事なことが沢山あるような気がした。帰路、大規模な侵食で地形が一変したという広大な河原をひたすら歩きながら、この国の人たちと一緒に考えられることは何だろうと何度も自問した。このような機会を与えてもらったことに感謝したい。

